



芸能山城組 群芸公演スペシャル

～職業的演劇家・音楽家は果たして必須か～

第1部 青銅の交響楽“ガムラン” 第2部 群芸『鳴神』

2018年11月16日(金) 開場 18:00 開演 18:30 なかのZERO 大ホール

これをいうには、少し長い物語にお付き合いいただくことを、お許しいただかなければなりません。

密林の奇蹟

— 1983年、山城祥二はアフリカ最深部の巨大な熱帯雨林〈イトゥリ森〉(総面積7～8万km²で北海道に近い)に、最後は自身の足で100kmを走破する探検を敢行し、もっとも原初性が高いといわれているムブティ・ピグミーとの出逢いを実現しました。その時のピグミーさんたちのパフォーマンスの記録(JVCワールドサウンズ『密林のポリフォニー』)は、かなり忠実度の高い音質のCDとして公開されており、実際に聴くことができます。

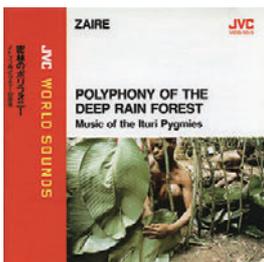
それらピグミーの人びとの音楽を耳にした山城は、そのインパクトを「私の魂を躰ごと吹き飛ばしてしまう衝撃そのもの」と述べています。それらは、高度な形式、優美で繊細な表情、そして音楽の確かな成就など、人類にとってのひとつの極致を思わせる、卓越したものだったからです。

さらに、CDに収録されたポリフォニーを西欧音楽の〈五線譜〉上に採譜してみると、そこには驚くべきことに、ルネッサンス期ヨーロッパ最高のポリフォニー作曲家ジョヴァンニ・ピエルルイーダ・パレストリーナの作品そっくりの美しい旋律線をもつ楽譜が姿を顕わしたのです。フランドル楽派風に模倣を重ね

る旋律線は、順次進行を活かした流麗な音列を描き、尽きることがありません。そのまま対位法の教科書に載せられそうです。

また、パレストリーナでは、ひとつのパートを構成する複数人間が、楽譜に固定されたひとつの旋律を声を揃えて唱うのに対して、ピグミーさんたちでは何と、ひとりが1パートを担当します。しかもすべて即興で演奏するという信じられない超絶の技が振るわれているのです。さらにいえば、このセッションの主力は、10才前後の子供たちなのです。そのうえこの人びとには、〔演奏に先立つ練習〕という概念も実態も存在しません。すべては常に〈本番〉として実行されています。

進化人類学的に観ると、このように途方もなく高度な形式・内容をもつパフォーマンスというもの、それを〔演じ奏でる技量〕そして〔それを楽しむ脳機能〕とともに、少なくとも数千年前から、そしてもしかすると数万年前あるいはそれ以上の太古からホモ・サピエンスに唱い継がれてきた可能性さえ、否定でき



パレストリーナ作品「アヴェ・レジナ・チェロルム」の一部



ムブティ・ピグミーのポリフォニー



深い森でピグミーさんのセッションを録音する山城祥二

ません。こうした活性をすべての構成員が身に付けている文化現象、社会現象、そして生命現象は、ムブティ・ピグミーなど狩猟採集社会に観ることができる一方、高度に文明化した社会にはまったく見ることができません。〔文明化に伴って劣化する芸術的活性〕のたいへん顕著な例として、私たちはこの現象を見過ごしてはならないのではないのでしょうか。

文明から隔絶したアフリカ最深部に、生命を賭して訪ねたピグミーさんたちのポリフォニーは、山城の想像をはるかに超える奇蹟そのものというべきその形式・内容の素晴らしさとその美しさで彼を歓喜させました。それとともに、彼の思考・行動のプラットフォームとなっている近現代文明に、激しい疑義、それも否定的な疑義を芽生えさせました。こうして、近現代文明の限界を超え、より生命科学的に矛盾の少ない思考・行動の枠組を求める山城の人生の新たな旅立ちが、始まったといえます。

バリ島でも — もうひとつ、熱帯雨林ほどアプローチする上での危険や負担の多くない、つまり体験可能性の高い点で絶妙な別の例を挙げます。それは〈インドネシア・バリ島〉です。たとえば、ニューヨークで活躍したメキシコ人の画家、ミゲル・コバルピアスは、不朽の名著『バリ島』(Island of Bali, 1939)で世界の耳目をこの小さな島に惹きつけました。その中でコバルピアスは、「バリ島ではだれもかれも芸術家に見える。苦力も王族も、祭司も農民も、男も女もみな、踊れるか、楽器を演奏できるか、木や石の彫刻ができる」。「私たちの地域の有名な楽団のリーダーのうちひとりとは苦力、もうひとりとは金銀細工師で、三人目はお抱え運転手だった」と述べています。ここに描かれたバリ島の社会構造は、現在でも本質的に変わっていません。現地では、それを現在でも至るところに観ることができます。もちろん近代国家としての姿を整える上から、国立の芸術大学が設立され、西欧文明とのインターフェース機能を具えた教授たちも組織されています。しかしその人びとの本拠は農村の地域共同体で、身分も多くは農民です。そして制度的な教育機関ではなく、〈村のまつり仲間〉の〔演じ奏で楽しむ〕営みの真髄として存在しているのです。

このバリ島の音楽・舞踊では、ピグミーさんたちが音楽や踊りを〔常に本番〕として実践し、練習、学習、稽古といった〈準備〉をまったくといってよいほど行っていないのとはすこし違ったところがあります。それは、音楽にせよ踊りにせよ、共同体の先人たちが手を取って教える、〈稽古〉という一種の慣行的かつ制度的な色あいも加味された学習が準備されていて、それが固有の形式・内容を持続させる背景にもなっています。この点に注目すると、

農耕文明に踏み込んでいないピグミーの人たちの実践している、ホモ・サピエンスの遺伝子の、より高度に本来性を活かした読み取り方とその卓越した総りというものは、きわめて注目に値するのではないのでしょうか。

職業とは — ここで、〈職業〉とはなにか、ということを改めて考えてみましょう。日本国厚生労働省の定義によれば、「職業とは、職務の内容である仕事や課せられた責任を遂行するために要求される技能、知識、能力などの共通性または類似性によってまとめられた一群の職務をいう。」とあります。こうしてまとめられた職務として、演劇・音楽に携わる人びとが、〈演劇家〉、〈音楽家〉という職業のカテゴリーをつくるわけです。専門分化が本格化した地球社会の現状では、これら職業的演劇家・音楽家たちは、ひとつの限られた対象や分野に対してもっぱら集中して従事する〈専門家〉という枠組を形成します。

ホモ・サピエンスの生物学的活性は、先天的な遺伝子レベルでは全方位的に広がっています。そうした人間の一個体を〈専門家〉に造りかえる人工的な方法が〈専門教育〉で、たとえば職業的音楽家を造るためには、ご存知のように〈音楽大学〉などがその役割を果たします。

そこで行われることを生命科学的に眺めると、ホモ・サピエンスの遺伝子に約束された全方位的活性の中から、〈音楽〉という特定のひとつの領域に関わる活性に限定して獲得、成長、成熟などを図る一方で、それ以外のすべての活性の獲得、成長、成熟を可及的に制限するものとなっています。

目的外のものごとを切り捨てて目的だけに集中すれば、より大きな成果が得られる、という線形的、加算的な発想で、生命科学的な根拠、特に脳機能の複雑性を視野に入れた根拠は、希薄です。それゆえ〈排他的単機能化を特徴とする専門化〉と呼ぶにふさわしいような実態を否定できません。そのため、幼少期からこうした専門教育の過程が選択された個体では、その活性の全体像は、必然的に、ホモ・サピエンスにとって標準的な活性水準に達していない領域を少なからず含む、偏りが大きく完成度のより低いものに止まる傾向を示します。

職業的音楽家を目指す子供で、幼児からピアノの練習を行うことをしない、ということは稀でしょう。しばしば一日数時間に及ぶピアノの練習は、たとえばその子の〈ドロンコ遊び〉の機会を奪うかもしれません。このドロンコ遊びが、もしかして人類の



バリ島を踊る専門家教育を受けていない少年

一個体の成長に欠かせないものであった場合、ピアノの技と引き換えに、標準的な人類の活性水準を喪った個体が、〈専門家〉の名のもとに現れることとなります。ちなみに、〈ドロコ遊び〉のハイライト〈ドロコ団子作り〉では、「団子の大きさ」「どのくらい真球か」「表面のつや」「落下させても壊れない耐久性」など、子供たちながら適切かつ多様な価値基準で評価し合っています。

このようにして人類が子供の時、遊びを通じて発達させる脳機能の有効性はホモ・サピエンスにとって測り知れず、もちろんその多くは必須かもしれないのです。

この一点に注目しても、目標として設定した何物か——音楽を例にとればピアノ、ヴァイオリンなどの〈演奏〉という名の〔音についての操作機能〕、あるいは作曲という名の〔音についての配列機能〕の活性など——を特化した状態に高めることを目指し、それと引き換えにその他の脳機能を含む生命活性を制限または排除することが〈専門的音楽教育〉の本質的屬性であることは否定できません。このことのもつ

生命科学的な矛盾を無視することは、危険かもしれないのです。

〈演奏〉や〈作曲〉など、音を媒として精神世界へ働きかける営みについては、それを行う〈専門家〉の側が対象を音楽に限定しその他を排除または制限した状態にある専門的音楽教育を受けた〈職業的音楽家〉であった場合、ひとつの問題が現れます。その専門家の脳機能の方が、そうでない普通の人びとの脳機能に較べてより未発達かつ多くの場合、よりアンバランスな状態を反映している可能性が濃厚になることです。ピアノの優等生になるために長時間練習に励み、よってそれ以外の脳機能の発達が標準的な人類として成熟する機会を多くの方位について喪った、いいかえれば未熟で偏った状態でピアノを駆使する、ということが一般的であるのかもしれませんが。しかし先に挙げたピグミーやバリ島の例は、このような〈排他的単機能化に基づく活性の集中による専門化〉という作業仮説が必須でないばかりか、有効でもないことを、動かしがたい事実として告げています。このことの宿す矛盾は深刻です。

密林の奇蹟から都市の奇蹟へ——〈脳の排他的単機能化〉の犠牲になっているかもしれない職業的演劇家・音楽家にあえて頼らず、ホモ・サピエンスの遺伝子に約束された脳機能の全方位性を素直に活かし尽くし、ピグミーさんたちが密林で実現している奇蹟を現代都市に蘇らせる……。この夢はすでに、私たち芸能山城組によって、幾たびか現実化しています。〈ピグミーのパフォーマンス〉〈ブルガリア・ジョージア(グルジア)の民族合唱〉〈バリ島ガムランの演奏・舞踊〉など、〈ケチャ〉のバリ島人以外による初めての全編上演に当たって芙二三枝子舞踊団のお力をお借りした以外はすべて、〈職業的演劇家・音楽家〉が関わらない状態で、それらを実現してきました。そのうえ、初演のころの〈群芸『鳴神』〉の客席には、このち日本の演劇界



ガムラン・ゴングビヤール・グループ“ヤマ・サリ”

に変革の嵐を呼び起こす蜷川幸雄や三代目市川猿之助などの姿が見られています。のちに蜷川は一連のシェークスピア作品の演出にあたって、通常の劇場が舞台と客席とを二極分化して対峙させ固定した構成を打破し、客席も演技空間として活用する手法を採り効果を挙げました。そこには、客席を舞台同然の演出空間として活用する群芸『鳴神』の影響を窺うことができ

ます。またのちに猿之助が拓いた〈スーパー歌舞伎〉、特にその第一作となった『ヤマトタケル』では、群芸『鳴神』で私たちが創り出した〈高さ〉を加え三次元化した舞台空間の構築や出演者たちの躰を動的／静的オブジェとして活用する群衆演出の手法などが、かなり直線的に導入されています。

これらのことは、群芸『鳴神』に象徴される職業的演劇家・音楽家なしで創られたパフォーマンスが、高い実績をもつ演出家・音楽家に新しい知恵を伝え貢献することさえ、ありうることを示しているのではないのでしょうか。

奇蹟のその先へ——こうした私たちの軌跡を改めて自ら点検するとともに、それを現代日本に活かそうとしてがんばっている私たちの現状と射程を〔演じ奏で楽しむ〕ことを愛するすべての方がたに評価していただき、新しい旅出の糧としたい、こうした願いをこめて、今回の公演を企画しました。ぜひご覧いただき、ご意見をたまわりたく願っています。

そしてそれにも増して、私たちのこのささやかな模索、そして実験を、あなたとご一緒に試みることを願ってやみません。〔演じ奏で楽しむこと〕を愛する魂をもったすべての皆様、とりわけ、ライフワークとして何を選ぶかの岐路に立ち、その選択肢の中で〈職業的演劇家・音楽家〉が有力となっている方がたを、お誘いしたいのです。

それには特別な理由があります。経済原理主義のもとにある現代社会では、職業的演劇家・音楽家は〈事業の経営者〉という実質をもち、資本(賃金)を投資して事業(この場合、演劇行為や音楽行為)を営んで収入を得、出資した資金等を回収した上に利益を生み出さなければなりません。

たとえばピアニストの場合、音楽大学入学から卒業までの専門教育に、現状では約1千万円の投資が必要といわれます。これに4年間の時間と膨大な量の練習という、きわめて重い投資が行われ、ひとりの〈大学卒ピアニスト〉が誕生します。だがこの段階ではピアノを弾いて収益を発生させることができず、コンクールなど〈競争的評価機構〉の評価を獲得してはじめて、観客から料金を頂戴してコンサートを行うことが、きわめて低い確率ながら現実化します。このように〔巨額の資金・長期の時間・莫大な労力〕の投資に加えて〔きわめて低い成功確率〕を特徴とするピアニストという〈事業〉は、そのリスクに満ちた点から観ると、ギャンブルなどの〈投機〉(賭け)に近い性格を帯びています。より極端な例としては、〈作曲科〉卒業生の、社会で実

用化された作品を生涯を通じてただひとつでも遺すことがない、といったケースがゼロとはいえない現実さえ、見られるのです。そして見逃せないのは、これらの過程がことごとく、〈競争〉——それも深刻な——という現象を伴っていることです。

〔演じ奏で楽しむ〕という〈初志〉では、職業的演劇家・音楽家を目指す皆さんとその道を辿らない私たちとが、そんなに大きく隔たっているとは思えません。ただ私たちは、幸いにもその実像に触れることができたピグミーさんやバリ島の皆さんをお手本にして、〔ホモ・サピエンス本来の遺伝子に埋め込まれたパフォーマンスの種〕を素直に呼び出して〔演じ奏で楽しむ〕、というやり方の存在に気付き、それを実現しようと工夫を重ねてきました。そのために、生命科学の知恵をはじめさまざまな知恵を集めて手造りの試行錯誤を続けているのです。

こうした手造りのやり方が馬鹿にできず、最前線の職業的演劇に影響を及ぼすことさえあることを、先に群芸『鳴神』に関連して述べました。音楽についても同様で、1976年にいただいたイタリア放送協会賞を皮切りにさまざまな賞を受賞し続けます。メディア関連では、昨年9月、米国のミランレコード社からリリースしたアナログレコード『交響組曲AKIRA』は、ビルボード・チャート（ヴァイナルレコード部門）で第5位を占めています。このディスクは、妥協のない辛口の評価で権威をもつ米国の〔Pitchfork〕で、「日本映画史におけるもっとも重要な映画音楽のひとつ」「目を閉じれば登場人物の傍らに在るかのような臨場感」といった賛辞とともに〔8.4〕という減多に出ないハイスコアを出し、その月の〈ベストアルバム〉に選ばれました。なお、この作品は、作曲を含む音楽の専門教育をまったく受けていない山城祥二によって創られ、〈日本アニメ大賞最優秀音楽賞〉を受賞しています。

こうした評価がどのような意味をもつのか、実は〈素人〉である私たちには必ずしも判然としません。しかし、私たちの試みの総りがどうやら世界の人びとに手応えを感じさせていることは、信じられそうです。



バリ島のガムランアンサンブル・ゴングビャールの楽器群

もうひとつ強調したいのが、私たちの群れの成り立ちは、本質的に、〈競合〉〈競争〉といった〈競い合い〉〈せめぎ合い〉の位相をもっていないことです。それに代わるものとして、〈絆〉〈以心伝心〉〈阿吽の呼吸〉などが群れの位相をつくっています。このことの快適性と安心感は言葉に尽くせません。

〔演じ奏で楽しむ〕という志のもと、〈職業化・専門化〉とは違った「もうひとつの道」を切り拓いてきたやり方を、この公演を機会に、〔皆様とご一緒に演じ奏で楽しむ〕という形で〈公開〉してはどうか、と私たちは考えました。〔演じ奏で楽しむ〕ことを願うもろもろの皆様、とりわけ職業的演劇家・音楽家を選ぶかどうかの岐路に立っていらっしゃる皆様方が、奮って〔もうひとつの幸せな可能性〕を体験されるよう期待し、お待ちしております。

芸能山城組の舞台をご一緒にしませんか？

職業的演劇家・音楽家でないことをメンバーの唯一の資格とし、〔遺伝子本来性〕のパフォーマンスを創ってきた芸能山城組の最高峰をなすオリジナル作品群芸『鳴神』は、わずかな稽古でも安定した表現を実現するよう創られています。大団円「祭」の場では、ひとりひとりが自分自身の演出計画を創る——つまり〔自己が演出家〕となる驚きを味わいます。〔演じ奏で楽しむ〕ことを愛するどなたにも、どこにもない歓びと驚きがいっぱいの舞台を、ご一緒いただくことができます。演劇や音楽・舞踊などの経験はまったく要りません。

初演から40年を経て練り上げられてきた群芸『鳴神』の集大成ともいべきこの公演。またとない機会をご一緒に、〔もうひとつの幸せな可能性〕を体験してみませんか？参加費は不要です。

第1部 青銅の交響楽“ガムラン”

インドネシア・バリ島の青銅の交響楽“ガムラン”は、スヴァツラフ・リヒテルやジョルジョ・シフらに匹敵する1秒間に13回をこえる迅速華麗なパッセージを、指揮棒なしの気合で実現します。それは〈絆の脳機能〉が映える共同体ならではのワールドミュージックの精華です。今回は、芸能山城組のガムランの師匠である世界最高峰のガムラン奏者・作曲家チョコルダ・アリッ・ヘンドラワン氏による現代曲を中心に、山城祥二によるガムラン作品もあわせてご披露します。

第2部 群芸『鳴神』

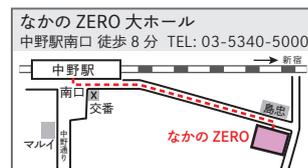
歌舞伎十八番『鳴神』を物語のベースに、日本の伝統的な歌や踊り、声明、和太鼓、バリ島のケチャ、ロック、電子音楽などの多様な表現と、最新鋭の音響・照明テクノロジーなど、伝統と現代が渾然一体となって展開する“劇場スペクタクル”です。変幻自在な声の表現が創り出す幻想的な音世界、雷鳴轟くなか天に駆け昇る“巨大龍”。そして祭の場面では、演者のひとりひとりが演出の脳機能を発揮するという驚くべき戦略のもと、百花繚乱のパフォーマンスが魂を揺り動かし、劇場全体が夢幻の祝祭空間へと飛翔していきます。

◆チケット 全席指定（前売・税込／当日券は500円増し）
 一般 HS席 7,000円 S席 5,000円 A席 4,000円
 学生割引 HS席 5,000円 S席 4,000円 A席 3,000円

※学生割引は 芸能山城組公式サイトまたは電話でのみ受付。
 チケットは当日会場で学生証をご提示いただきお渡しします。

◆チケットのお求めは
 芸能山城組公式サイト
<http://www.yamashirogumi.jp>

イープラス eplus.jp



◆ 芸能山城組独自の演劇・音楽の実践を体験したい方の参加方法、お申し込み、お問い合わせは
 芸能山城組 公式サイト <http://www.yamashirogumi.jp> もしくは「群芸仲間」で検索
 メール：mail@yamashirogumi.jp 電話：03-3366-4741

